

この男性は昨年暮れに早期の胃がんが見つかり、藤田保健衛生大学病院（愛知県豊明市）で今月、ロボット

胃がんなど

（森井雄一）

ロボットを使った内視鏡手術が今年4月、胃がんなど12種類の手術で保険適用される。これに先立ち、自費診療でこの手術を受けた愛知県豊明市の男性（60）は「傷がほとんどなく手術後の痛みも軽く済んだ」と体験を話す。ただ、安全に行うには技術が必要な手術で、病状によっては適さない場合もある。十分に説明を受けて選ぶことが大切だ。

ロボット支援手術

ト手術を受け、胃の3分の2を切除した。開腹と違い、おなかの傷は小さく済み、術後1週間であまり痛みもない程度まで回復した。腹腔鏡や胸腔鏡といった内視鏡を付けたロボット手術は、腎臓がんや前立腺がんの手術にしか保険が利かなかったが、今春からは胃、大腸、肺がんなど12種類の手術にも拡大される。

ロボットは、米企業が開発した「ダビンチ」。約280台が全国の大学病院などに導入されている。ロボット手術は、体に数か所開けた小さな切り口から、ロボットアームに付けた内視鏡や操作器具を差し込んで行う。医師は離れた場所にある操作台に着き、体内の映像を見ながら手元のハンドルを動かしてロボットを操縦する。

メリットは手術する部分の見やすさと操作のしやすさだ。細い血管や神経も拡大して見られる映像になったり、握りやすさもある。握りやすさ、通曲がり、通で使う器具部分の処置、同病院総授の宇山一鏡は手首をくイメージだが、手首を動かして細かく磨けるのがロボット手術」と説明する。

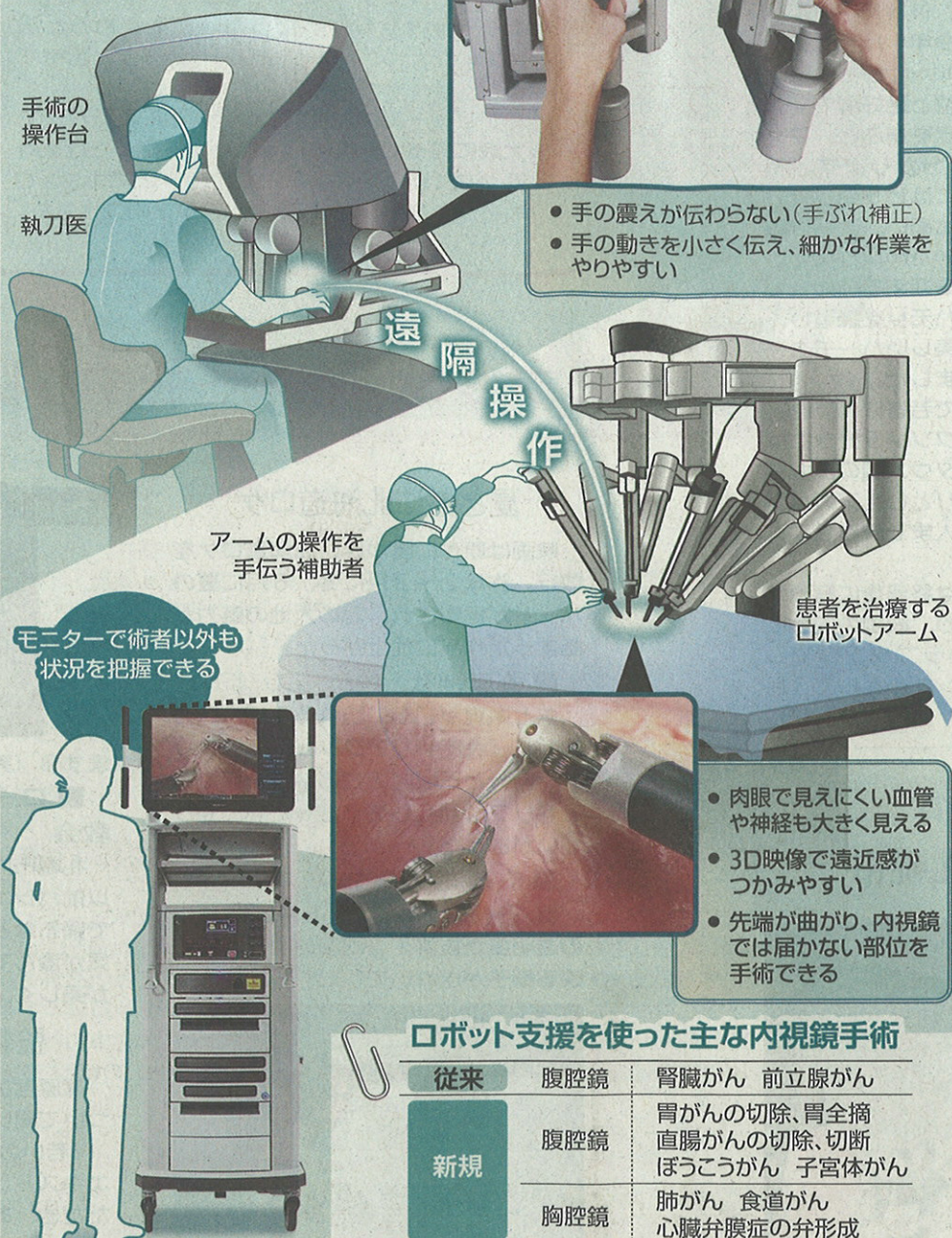
ロボット手術を受けた男性は「どこに傷があるかわからないほどで、技術の進歩に驚いた」と語る。ロボット手術は、ロボット自体が2億〜3億円と高額で、通常の内視鏡手術に比べ1回の費用も割高になる。しかし、それを上回る治療のメリットがあるかどうかはつきりせず、定着に時間がかかっていた。

もちろん技術のある医師が行うのが前提で、日本ロボット外科学会理事長の渡辺剛さんは「誰でも使いこなせるものではない。トレーニングを積んで安全に行うことが重要」と話す。

保険適用 新たに12種類

最近、同大や佐賀大など15病院で実施した胃がん手術の臨床試験で、通常の内視鏡手術より合併症が少ないという結果が出た。とはいえ、腫瘍の大きさや位置、進行度によっては適さないケースもあり、開腹が必要になる。ただ、「腹腔鏡手術ができる症例なら、ロボット手術に置き換えることは可能だろう」と宇山さんは推測する。

ロボット支援手術のイメージ



- 手の震えが伝わらない(手ぶれ補正)
- 手の動きを小さく伝え、細かな作業をやりやすい

- 肉眼で見えにくい血管や神経も大きく見える
- 3D映像で遠近感がつかみやすい
- 先端が曲がり、内視鏡では届かない部位を手術できる

ロボット支援を使った主な内視鏡手術

従来	腹腔鏡	腎臓がん 前立腺がん
新規	腹腔鏡	胃がんの切除、胃全摘 直腸がんの切除、切断 ぼうこうがん 子宮体がん
	胸腔鏡	肺がん 食道がん 心臓弁膜症の弁形成